

尖閣諸島の名称あれこれ

國吉 まこも

(尖閣諸島文献資料編纂会研究員)

いわゆる尖閣諸島は、東シナ海に浮かぶ5島3岩礁からなる島嶼群の総称です。この島々は、古くから東シナ海を航海する際の標識島として知られてきました。Wikipedia¹などでは、日本名「尖閣諸島 (Senkaku Islands)」、中国名「釣魚島およびその付属島嶼 (Diaoyu Islands)」²と説明していて、さらに英語名の「Pinnacle islands」—これはおそらく尖閣諸島を直訳した名称ですが少々ややこしく、名称の由来についてはあとで触れます。—として紹介されています。

尖閣諸島は航海上の目印として知られていましたが、どこの国の領土とされることもなく、1895年日本領土に編入にされる以前は無主の島々でした。日本の他の島々と比べて、若い歴史を持つ島といえるでしょう。今年2015年で領土編入120周年を迎えます。

・「尖閣」という名称

さて、最初に書いた通り、尖閣諸島は領土編入以前から東シナ海航海の標識島として知られていました。中国の文献には主に釣魚嶼(魚釣島)、黄尾嶼(久場島)、赤尾嶼(大正島)、廢藩置県が実施される以前の琉球王国(沖縄県)では、魚釣島、久場島、久米赤島、また、その総称としてヨコンコバ³島という名称で呼ばれてきました。ここでお気づきになったかもしれませんが、「尖閣」という名称はもともと中国や沖縄の人によって呼ばれていた名前ではありません。これを名付けたのは、イギリス海軍の測量船サマラン号の艦長で、エドワード・ベルチャーという

1 http://en.wikipedia.org/wiki/Senkaku_Islands

2 中華民国「釣魚台」(Diaoyutai)、中華人民共和国「釣魚島」(Diaoyudao)だがここでは「釣魚島」として略する。

3 この名称が訛って、ユクンクバ、イーゲンクバなどとも呼ばれるが、これは久米赤島(大正島)を除く総称である。沖縄の人々の間では、久米赤島は名称からして、久米島の周辺島嶼と認識されていたのではないかと推察される。

19世紀の軍人でした。

少し順を追ってその概略を書いてみましょう。18世紀中頃に西洋で制作された海図には中国の文献を元にして尖閣諸島の島々が記載されるようになっていました。具体的には、魚釣島(Hoapin-su)、久場島(Tiau-su)、大正島(Raleigh Rock)の3島が記されていることが多いのですが、南小島や北小島には名称が付されていませんでした。

アヘン戦争⁴の後の1845年、中国沿岸及び東シナ海の島々の完全な測量任務を命じられたベルチャーは、尖閣諸島を含む沖縄の島々の測量を実施し、その航海記の中で魚釣島のすぐ側に浮かぶまだ名前が付けられていない島々—現在言うところの南小島と北小島—に「Pinnacle Rocks」あるいは「Pinnacle Islands」と名付けました。そもそもの“pinnacle”⁵＝「尖閣」は南小島と北小島に与えられた名称でした。両島の特徴である海中から突き出たようにそびえ立つ奇岩から受けた印象をそのまま名付けたと思われます。

ベルチャーによって書き加えられた南小島・北小島「Pinnacle Islands」はその後、「Pinnacle group (魚釣島・南小島・北小島)」として海図に採用されていきます。明治期、西洋の海図情報の吸収とその蓄積に熱心だった日本の海軍当局者は、西洋のそれを翻訳し、海図に「尖閣群島」として記していくようになります。当時の日本における海図情報がうかがえる資料に、1886年3月日本海軍が刊行した『寰瀛水路誌』⁶があり、その「大日本沿海北西部 第一巻下」には、—尖閣群島(和平山＝魚釣島を含む、南小島北小島です)、爾勒里岩(ローリー岩、現大正島)、低牙吾蘇島(チャウス、現久場島)—と記されています。

・1900年の黒岩恒による「尖閣列島」命名の意義について

現在我々が呼んでいる「尖閣諸島」という名称は、明治期に名付けら

4 アヘン禁輸を発端とする中国の清朝とイギリスとの戦争(1840～42)。イギリス東インド会社は中国との片貿易を是正するため、インド産アヘンを中国へ密輸し、その結果中国のアヘン輸入は激増し、巨額の銀流出など経済上、財政上、衛生上、重大な弊害もたらされた。<https://kotobank.jp/word/%E3%82%A2%E3%83%98%E3%83%B3%E6%88%A6%E4%BA%89-27018>

5 1 (屋上・塔上の)小尖塔(せんとう)(⇒Gothic さし絵)。2 (とがった)峰。<http://ejje.weblio.jp/content/pinnacle>

6 http://www.geocities.jp/tanaka_kunitaka/senkaku/kaneisuiroshi-1886/

れた「尖閣列島」という名称から受け継がれているものです。いくつかの文献では、「尖閣列島」という名称は1900年に沖縄県師範学校教諭の黒岩恒という人が命名したとされています。これは事実その通りですが、すでにそれより以前ベルチャーによって「Pinnacle = 尖閣」という名称が付されていたとして、揚げ足を取るような指摘をする方もいます。

どちらも事実ではあるので、別に構わないようにも思いますが、黒岩が「尖閣列島」と名付けたその意義について少し考えてみたいと思います。

さて、繰り返しになってしまい恐縮ですが、沖縄では古くから尖閣諸島を魚釣島、久場島、久米赤島という名称で呼んでいて、特に「魚釣島、久場島」の2島を包括して「ヨコンコバシマ (ユクンクバシマ)」と呼んできました。

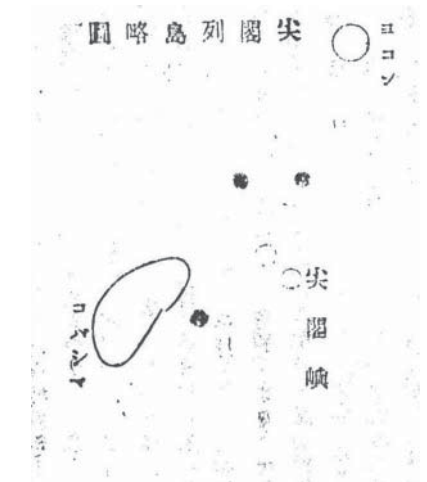
また、前述した通りベルチャー以降、海図や水路誌等には、「魚釣島、南小島、北小島」を包括して「尖閣群島」と記されることになっていました。

ここで注意していただきたいことは、地元沖縄での総称「ヨコンコバシマ」と海図等の総称「尖閣群島」には少し相違があります。前者は「南小島、北小島」を欠いていて、後者は逆に「久場島」が含まれていません。当時古賀辰四郎という海産物商人が尖閣諸島中、魚釣島・久場島の開拓を開始し、また南小島にも小屋建て等をなしていました。魚釣島から南小島、北小島、久場島にかけて、開拓のための人々が常駐し寝起きしている状況の中で、地元沖縄側が使用する名称と海図上の名称に食い違いがあることを、黒岩は危惧したのではないかと思います。そうした食い違いを修正する形で黒岩は「尖閣列島」という名称を提案しました。「尖閣列島」ならば「魚釣島、南小島、北小島、久場島」を包括し、地元沖縄の呼び名である「ヨコンコバシマ」の島々も含まれます。

参考島名比較表

ヨコンコバシマ	尖閣群島	尖閣列島
魚釣島	魚釣島	魚釣島
—	南小島・北小島	南小島・北小島
久場島	—	久場島

黒岩は、探険後、沖縄県私立教育会という教育団体の定例会で、「一抑尖閣列島と申は船浮港そもそもの北方九十余英里にある二大島もうす二小島の総称でして本県人は疾とうより此二大島を「ヨコンコバ」島と申して居ります。此列島は左の略図の如く列島の西南の方に位するもの最大に之をコバ島と申ます (図略)。支那人は釣魚台と云ひ或は和平山とも申します。洋名は「ホアピンス」です。東北の方に在るものは列島中第二位の島でして之を「ヨコン」と申ます。支那人の所謂黄尾嶼、洋人の「チヤウス」です。中間にある二小嶼が即尖閣嶼です。この小さ島の名を列島の上に被らせて尖閣列島と申のす。(略)」⁷と語っています。



(黒岩恒「尖閣列島談」に掲載された尖閣列島略図)

以上のことを考えれば、黒岩が提唱した「尖閣列島」という名称は、沖縄で古くから認識されてきた尖閣の島々と、海図等に記載された尖閣の島々の認識を一致させる意義があったことは明らかであり、その目的は今日においても充分果されていると言ってよいでしょう。

・尖閣諸島の俗称、古賀辰四郎の開拓初期から見る名称

尖閣諸島はほかにも幾つかの俗称で呼ばれてきました。ここでは尖閣の開拓者古賀辰四郎が沖縄の地元紙「琉球新報」に掲載した、尖閣諸島

7 黒岩恒「尖閣列島談」、琉球新報1900年6月29日付。この時期沖縄の地元民の一部は魚釣島を「コバシマ (クバシマ)」と呼び、久場島を「ヨコン (ユクン)」と呼んでいた。黒岩恒「尖閣列島探検記事」、『地学雑誌 第12輯 第140巻』東京地学協会1900年9月、457-458頁には「○魚釣嶼 釣魚嶼一に釣魚台に作る。或は和平山の称あり。海図に Hoa-pin-su、と記せるものはなり。沖縄にては久場 (クバ) 島を以て通す。左れど本島探検 (沖縄人のなしたる) の歴史に就きて考ふるときは、古来「ヨコン」の名によって沖縄人に知られしものにして、当時に在っては、久場島なる名称は、本島の東北なる黄尾嶼をさしたるものなりしが、近年に至り、如何なる故にや、彼我呼称を互換し、黄尾嶼を「ヨコン」、本島を久場島と唱ふるに至りたれば、今俄に改むるを欲せず。(略) —」とあり、名称の逆転について把握しているものの、後日の問題として取り扱うべきだと述べている。